

## ◇ 国 語

国7-1～国7-16まで16ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「その本は私が書いた」

と言えば、聞いた人はつよい印象を受ける。一種尊敬の念をいだくかもしれない。たいへんな仕事をしたものだ、とすくなくとも考えるであろう。それに対して、かりに、

「その本は読んだ」

と言つても、聞いた人はなんとも思わない。たんなる情報である。だからどうした、というような関心はいだかずに、ああ、そうかと聞きながすにとどまる。

書物がすくなく、入手の困難な時代では、本を読むのはいまよりもっと重要なことと受け取られていたに違いない。本を読むことがほとんど学者、高い教養人であるのと同じ意味をもつこともあり得たのである。

印刷術の発達フキユウ<sup>A</sup>によって、大量の書物が出まわるようになると、読者はいわば本の ア になる。たくさんの本をゆつくり時間をかけ味読するようになゆとりがない。読み流す、読みとばす。なにが書いてあるかわかればよいとする読書が増えるのは已むを得ない。本を読むことの意味は小さくなる。娯楽的な読みものについてはことにそうである。読者は作者とは比べものにならない低い役割の担い手になっているのが近代である。そしてついに、書物にとつて読者は不可欠な存在であることすら忘れられるようになってしまった。

たとえば、文学作品を研究する場合、まず、作者が問題にされる。わからなければ、イ 事実を調べる。どのようにして、その作品が書かれるに至ったかという事情なども研究される。作者と作品の歴史的事実を明らかにするためにしばしば大きな労力と時間が費される。これはコウギ<sup>B</sup>の読みの作業であるけれども、それを行なう人を読者とは呼ばない。作品は作者さえあればそれで成立するように考えるのが、広い意味での歴史的研究、文献学の基本概念である。読者は文学作品にとつて「黒子」でしかないものになった。

いったい、読む、とはどのようなことであるか、という吟味をうけることすらまれである。辞書によると、まず、

(1) 「文字や文を見て、それを声に出して言う」というのがあがっている。音読がもともとの読みなのである。ついで

(2) 「文字・文章などを見て、その表す意味を理解する」ここでは意味が考慮される。<sup>(a)</sup> 論語読みの論語知らずはここでいう読みではないことになる。初めの(1)の意味なら読んだことになるのである。さらに

(3) 「図形・グラフや、一見無意味な文字連続などの意味することを判断し理解する」という読みがある。これは(2)よりも一段と深い読み方で読者が問題になる読み方である。

(4) 「他人の心や将来のことを外見から推測する」は、読み手が存在しなくては成立しない意味をとることを目指す。

つぎの(5) 「囲碁・将棋で、先の手を考えたり、相手の手筋を察知する」は(4)のエン<sup>o</sup>・チョウ<sup>o</sup>と考えてよからう。(以上引用部は『大辞林』による)

声を出して文字を読むだけの低次の読みから、意味をとる、中次元の読みに移り、さらに、解釈、判断、察知によって理解する高次の読みまでが、読みというエイ<sup>o</sup>イ<sup>o</sup>の中に含まれているのであるが、一般には、このうち中次元の意味をとる読みだけが漠然と考えられているにすぎない。

低次の読みは、あるがままを **ウ** にくけとり、中次元の読みは意味さえとればよしとする。高度の読みでは、表現されていないものをふくめて理解する。積極的で、しいて言えば、創造的な読みである。文学作品など洗練された表現に関しては、この高度の読みが不可欠である。つまり、読者が大きな役割を果たすのに、それを中次元の読みのように理解するために文学研究などにおける読者不在の状況が生まれた。

いったいに、物体、たとえば、石ころなどを読むとは言わない。見ればわかる。必要なことはすべて見えている。とくに解釈しなくとも石は石であることが了解される。それに対して、「石がある」という表現は、見ただけでは、ただ、インクのしみ、文字の行列しか目に入らない。全部がくまなくあらわされているのではない。わからないところが、いくらかもある。石がどういようように存在するのか。大きさは、色は、なんのためのものか、などなど、書かれていないところが、いくらかもある。ただ、石がある、と低次の読みで、声に出すだけで読めたとするのでなければ、この不明瞭な部分は放っておくわけにはいかない。読者の責任においてその欠落部を補充、埋め合わせをする必要がある。解釈というこの作業は、読者によって書かれていないものを補充して成立するから、書き手には関係のない読者による創造である。

一般に言語表現は、こうした表現し切られていない、不確定要素を限りなくと言ってよいほど内包しているのが普通である。

物体としての石には不確定部分はほとんどない。だれが見ても石は石である。「石がある」となると、不確定要素が加わるから、多少の解釈が必要となる。さらに、「古池や蛙とび込む水の音」のようなことばになると、不確定要素の方が確定要素を上まわるから、<sup>(b)</sup>かいなでの読みではなにかわからなくなる。理解するには読む側での活発な推量、判断による解釈が必要である。この句を創ったのが第一次創造であるとするならば、そこから詩を引き出して感銘するのは、第二次的創造と言っても差し支えないはずである。

高度の読みは、創作に通ずる創造である。表現を読むおもしろさも、その創造的活動に<sup>(E)</sup>フズイする効果ということである。

解釈は、テキスト自体によって規制されない部分を多く含んでいる。読み手のコンテキストによって大きく左右される。読みはきわめて<sup>(E)</sup>エなものである。ひとつの表現を十人の読み手が読めば、厳密に言えば、十色の違った解釈になるのが自然、当然である。同じ人間でも、読む度に、違った解釈になることも避けることができない。読みは一回一回、独自の解釈を生じて成立する。

解釈は読まれる回数だけ多数多様になる。そのうちの一部、あるいはひとつだけの解釈が正しくて、ほかのものはすべて誤解であるといった考え方の上には、言語表現は立脚していない。むしろ、さまざまな解釈を許容するところにその特性があると考へることができ。数学の文章は解釈の余地がすくない。したがって、読んでおもしろくなく、感銘、感動することはない。法律の条文は、それに比べると、解釈を許す部分があつて、古来、法解釈学という学問もあるくらいであるが、読み手の解釈に対して<sup>(E)</sup>オであるところから、読んでおもしろい条文というものは考えにくい。

もつとも活発な解釈を許す、むしろ、誘発するのが文学的表現である。不確定要素がとくに用意されている。当然、解釈がなくてはわからないが、解釈をすること自体がよろこびを与えて、表現は<sup>(三)</sup>美的価値をもつ。詩歌は、写実的散文よりも不確定要素を豊かにもつために、より多く解釈を必要とする。そのために、芸術的なおもしろさをより多くもつのである。

〔外山滋比古『外山滋比古著作集3』による〕

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A フキユウ

- ① 介護キユウカをとる
- ③ 悲報にゴウキユウする
- ⑤ 会議がフンキユウする

② 過去の例にゲンキユウする

④ トツキユウ列車に乗る

1

B コウギ

- ① 対策をトウギする
- ③ 戦争のギセイ者
- ⑤ ギゾウ紙幣

② ケンギがかかる

④ ギフンを覚える

2

C エンチヨウ

- ① 新年エンカイ
- ③ 大学のエンカク
- ⑤ 雨天ジュンエン

② キエンをあげる

④ エイエンの生命

3

D エイイ

- ① 国民エイヨ賞
- ③ エイキを養う
- ⑤ 詩歌をロウエイする

② カンエイ事業

④ キエイの評論家

4

E フズイ

- ① 免許証をコウフする
- ③ キョウフにおののく
- ⑤ ギモンフをつける

② 単身フニン

④ 両親をフヨウする

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①愛読者 ②消費者 ③鑑賞者 ④鑑定者 ⑤解説者 6

イ ①個性的 ②履歴的 ③背景的 ④伝記的 ⑤社会的 7

ウ ①受動的 ②肯定的 ③定形的 ④客観的 ⑤主観的 8

エ ①散発的 ②多面的 ③個人的 ④集団的 ⑤対照的 9

オ ①制限的 ②全面的 ③部分的 ④緩和的 ⑤観念的 10

問三 傍線部 (a)・(b) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 論語読みの論語知らず

11

① 論語の文章をすらすら読むことだけではできないが、その意味を理解することがないので、論語を読んだことのない人と同じであること

② 書物は論語だけしか読まず、論語の理解に不可欠な他の書物は一切読もうとしないので、論語そのものも理解し得ないこと

③ 書物の内容を表面的に理解するだけで、書物の真髓の理解に達せず、また、その説くところを実行するに至らないこと

④ 書物を何度も繰り返し読み、概略を理解しながら、あと一步のところまで本質的な理解に届かず、実生活に活かせないこと

⑤ 論語を愛読しながら、論語がいつ頃、どのようにして書かれるに至ったか等の事情に無知であること

(b) かいなでの読み

12

① ことばの一語一語をなぞってゆき、解釈を加えながら深い意味を追求していこうとする読み方

② ことばの一語一語にこだわり、推量や判断を加えて読むあまり、全体の内容がかえってわからなくなるような読み方

③ 寝ころがって片手で本を持ち、漫然と文字を追うだけのようないち集中力を欠く読み方

④ ことばの意味の理解は保留し、文字面を掻き撫でるように、想像力を駆使してことばが喚起するイメージをつかもうとする読み方

⑤ ことばの一語一語を深く味わうことなく、表面を軽く撫でるように、ひと通りの意味が理解できればよしとする雑駁な読み方

問四 傍線部(一)「読者は文学作品にとって『黒子』でしかないものとなった」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ① 文学研究などに要求される高度の読みがすたれ、意味が理解できさえすればよしとする読者の存在が希薄になった
- ② 創造的で高度な読みが不可欠であるべき文学研究において、歴史的研究や文献学が主流となった結果、文学研究者は読者の後塵を拝する存在となった
- ③ 何が書かれているかを理解するためだけの読書が増えるに従い、本来、書物にとって不可欠な存在であるべき読者は、作者よりはるかに低い役割に甘んじるようになった
- ④ 文学作品は作者だけで成立し、文学研究は作者だけを研究すれば事足りるという傾向が強まった結果、読みの性格が変質した

問五 傍線部(二)「美的価値」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ① 豊富な不確定要素を持つために解釈を誘発し、解釈の多様性に開かれていることで解釈のよろこびと読むおもしろさを与える言語芸術上の効果
- ② 豊富な不確定要素を持つ言語表現で、解釈の多様性に寛容であるテキストのみならず言語表現上の効果
- ③ 十人十色の読みと解釈を許容する不確定要素を持つために、読むこと自体に創造性をもたらすテキスト
- ④ 豊富な不確定要素を持つために独自の読みを規制し、多様な解釈の可能性に開かれていて、読むよろこびとおもしろさを与える価値



問六 この文章において、筆者の考える「読者」とはどのような存在とされているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ①対象作品のテキスト内部の分析を目的とするだけでなく、その創作過程や作者の生育環境なども考慮した読みを徹底させる文学研究者
- ②テキストの不確定要素を推量、判断により補充し、自由に独自の解釈を引き出す高度の読みを通じ、感銘を受け取る二次的創造者としての読み手
- ③本を書くことと読むこととの間で、低次元の読みが増えるにしたがい、低い位置に転落した読み手の復権をめざす言語表現の芸術家
- ④テキストの不確定要素を自分なりのコンテキストに従い解釈し直して、感動的なテキストに改変しようとする志向を抱く読み手

問七 この文章の趣旨として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

16

- ①文学研究における読者の不在は、印刷術の発達をもたらした書物の大量生産の必然的現象である。
- ②読むとは、作品やテキストの意味を理解するだけでなく、多様な解釈の過程を楽しみながら創造の過程に参加する読者たることである
- ③読み流す、読み飛ばす低次の読みに止まっている読者は、欠落部を補充する責任を放棄するに等しい
- ④読むことと書くことは本来表裏一体のものであり、作者と読者は作品創作において同等の役割を担っている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

行き過ぎた市場化と現代商品は、子どもが段階を経て育っていくという古典的な生育のシステムを無惨にも破壊してしまいました。かつて子どもたちは、家庭でまず親から言葉を教えられ、兄弟姉妹、次いで同じぐらいの世代、あるいは上級生や下級生の近所の子ともと遊んだり、喧嘩をしたりということを通じ、さらには近所の大人たちとのやりとりを体験することで、さまざまな言葉を学び、少しずつ言葉を獲得し、生活のスタイルを身につけていきました。

その次なる段階に、家庭と社会との中間的生活空間としての学校がありました。学校では、いままでつながりのなかった少し離れた同世代の子どもたち、それから親や近所の人とは違う教師という大人たちに出会い、そこでの共同生活を通じて、家庭とは異なる、半分社会が入り込んできた半社会・半家庭の生活を新たに、経験します。

やがて学校を了え、社会に出て、社会の一員として仕事をし、生活をし、また新たな家庭を築いて生きていくという、そういう家庭↓学校↓社会という段階を踏んだプロセスがありました。こうした過程のイッカンとしての家庭が、おそらく一九六〇年代の半ばぐらいから機能しなくなりました。

その原因を探っていけば、現代商品の氾濫に行き着きます。

一つはテレビやゲームであり、近年で言えば、パソコンのインターネット、メール、チャット、そしてケータイです。ここで一言断わっておけば、日本語では、アな機能を指すときの言葉としては「携帯電話」と言いますが、それ以上のユウギ性や付加要素の加わったときに、「ケータイ」という別の呼び名になります。

現代商品の氾濫がなにを意味するかについて触れる前に、ヒトは、必ずしも生まれたときから人間ではないということを想起することが大切です。たとえば生まれてすぐに狼の群れの中で育てられたヒトは、言葉を話すことはなく、生物学的にはヒトであったとしても、文化的には四足で山野を駆け巡る狼Ⅱ獣にすぎません。

人間は、動物の一種、ヒトとして生まれてきて、そこから少しずつ言葉を知り、社会を生きていくスタイルを身につけて、文

化的な存在である人間になるわけです。その意味で、文化的存在としての「人間」というのはあくまでなるものであって、生まれたときから人間であるわけではありません。

子どもの成長過程には、いわゆる反抗期がありますが、これは、子ども自身の中にあるヒト的（獸的）な意識を発散し、抜いて、少しずつ人間としての言葉と生活スタイルを獲得していく節目の別名です。「純心な子ども」などと呼ばれますが、子どもは、決して無垢の汚れなき存在ではなくて、むしろ人間の原点に残る獸のような粗暴粗野な意識をホンゲン的に持っています。それを文明化あるいは文化化し、浄化、止揚するのは、言葉にほかなりません。「文明」と「文化」に「文」という文字が出てきますが、この「文」すなわち言葉の働きによって、原初的な獣（ヒト）の状態から激しく人間へと脱出していく時期が反抗期と言われる時期なのです。

動物のような粗暴粗野な存在として生まれてきた子どもたちにとっては、できれば イ な存在として家庭や学校が機能してほしいものです。むろん、従来の家庭や学校のあり方を新しい世代が乗り越えて、作り変えてゆくところに、社会あるいは文化の発展があります。とはいえ、最初から乗り越えるスタイルもなく、ただ社会に野放図に放り出されていたら、そこから学ぶものは何もなく、したがって成長も発展もないということになります。

近年、戦後と比べて教育の問題がいろいろと取り沙汰され、格別に教育が悪くなったように語られます。しかし、それでは一九四〇年代から六〇年代の戦後の日本に上質の教育があったでしょうか。「あつたか」と問われれば、「なかつた」と答えるしかありません。私自身の経験からも「なかつた」と言い切れると思います。しかし、この時代には日本全体を覆う貧困がありました。じつはそれこそが最大の教育者でした。

貧困下では、働かなければ食えないから、食うために職に就かなければならず、職に就いたらプロとしての技を磨かなければならず、遭遇する難題も一つ一つ解決しなければなりません。職に就くためにはやはり、技能なり学問なりを身につける必要があるとなれば、学校へもきちんと行くか、技能を身につける修業もしなければならず、また社会のルールや社会的な身の処し方もわきまえなければならぬ——そうした否応なく突きつけられる、社会的な枠組がありました。

また貧しいが故に家族同士が結びつき、さらには地域が相互扶助のキンミツなコミュニケーションを作り出す契機にもなり、それも教育として効果的に作用しました。

しかし戦後経済がフツコウし、高度成長以降、ある程度食べられるような時代となると、「貧乏」という社会的枠組が消えてしまいました。社会のすみずみまで行きわたっていた「貧乏」という名の名教育者がいなくなったのです。それと同時に、一方では子どもが少なくなった分、親が子どもの教育に熱心になり、また他方では、まったくの放任となってしまうました。

こうした「貧乏」が教育的機能を果たさなくなった社会では、すべての子どもに、口のきき方から、歩き方、手足の動かし方、ふるまい方、生き方に至るまで、一から十まで、すべてを手取り足取り教え込む、一種の帝王教育を施さざるをえません。野球のイチロー、卓球の福原愛、ゴルフの宮里藍などのように、つききりの親子教育が必要とされているのです。ところが、現実には、この必要に気づかず、「衣食足りて礼節を ウ」ではなく、「衣食足りては礼節を欠く」と言うしかない状況に陥っています。

テレビ、ゲーム、パソコン、インターネット、ケータイ……。こうした現代の商品が子どもたちの周辺に一気に、しかもボーダーレスに入り込んでいる状態は、まさに親から離れ、狼ならぬ、現代商品の群れの中で育てられているという状況を意味します。このような現代商品に育てられた子どもたちは、どういうことになるでしょうか。問題の本質は、じつは、そこにあります。現代商品の洪水に浸りきった子どもたちが心を奪われるのは、親や教師の言葉より、テレビやゲーム、あるいはインターネットから取り出す情報です。子どもから見れば、父親や母親、あるいは教師はきわめて旧ぼけた存在、そして発せられる言葉は、耳を傾けるに足りぬ（と思われる）旧くさい言葉になっています。つまり、これまでの、家庭↓学校↓社会というプロセスにあった教育を、現代商品が教える情報が一気にしのぎ、社会の教育機構を解体してしまったのです。

〔石川九楊『縦に書け!』による〕

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A イツカ|ン

- ① 敵陣にトツカ|ンする
- ② 利益をカ|ンゲンする
- ③ 人生をタツカ|ンする
- ④ 血液がジユンカ|ンする
- ⑤ 客をカ|ンゲイする

17

B ユウギ|

- ① ギ|ノウを身につける
- ② 政界を風刺したギ|ガ
- ③ テキギ|指示を出す
- ④ おジギ|をして去る
- ⑤ フルギ|を売る

18

C ホンゲ|ン

- ① 物事のゲ|ンリを知る
- ② ゲ|ンソ記号を覚える
- ③ 子どものキゲ|ンをとる
- ④ 正面ゲ|ンカンに集まる
- ⑤ 文明のゲ|ンリュウをたどる

19

D キンミ|ツ

- ① 油断はキンモツだ
- ② キン|コウが崩れる
- ③ キン|ベンな学生
- ④ 家計をキンシユクする
- ⑤ 駅にキンセツする

20

E フツコ|ウ

- ① 文章をコウセイする
- ② 親コウコウな息子
- ③ 学問をシンコウする
- ④ 法律をコウフする
- ⑤ 約束をリコウする

21

問二 傍線部（a）「止揚する」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 道徳的に好ましくない要素を排除し、消し去ること
- ② 進化したものを本来の姿に立ち返らせ、その様を肯定すること
- ③ 矛盾対立する二つの事物を、より高い段階で統一すること
- ④ 物事が変化しつつある様子を、あるがままに見つめること
- ⑤ 混沌とした状態にあるものを具体化し、体裁を整えること

22

問三 傍線部（b）「野放図」の用例としてふさわしくないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 彼は親の金を使って野放図に遊び歩いている。
- ② 事業の拡大に伴って商品の管理が野放図になる。
- ③ 外交の場では野放図な対応が求められている。
- ④ 頭に浮かんだことを野放図に書き連ねていく。
- ⑤ あのように野放図な性格の人は見たことがない。

23

問四 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当な語句を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①一時的 ②娯乐的 ③表面的 ④実質的 ⑤抽象的 24

イ ①絶対的 ②流動的 ③情緒的 ④革新的 ⑤同情的 25

ウ ①増す ②知る ③欲す ④得る ⑤見る 26

問五 傍線部(二)「段階を経て育っていく」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

27

①親や兄弟から言葉を教わり、学校において生活のしきたりを身に付けることと並行して、テレビやインターネットの情報を操る方法を会得するという、近年ならではの成長プロセスのこと。

②家族とのやりとりを通じて言葉を覚え、近所の人間や学校にいる人間との様々なかかわりを経て社会的ルールをも身に付けていくという、近年ならではの成長プロセスのこと。

③家庭において愛情を学びながら身体的に発育を遂げるとともに、学校において基本的な言語能力を身に付け、就職した後社会的ルールを習得していくという旧来の成長プロセスのこと。

④親から言葉を教わり、身近な人間とのやりとりを通じてそのバリエーションを増やした後、学校で他者との共同生活に慣れ、社会に出るといふ旧来の成長プロセスのこと。

問六 傍線部(二)「ヒトは、必ずしも生まれたときから人間ではない」とあるが、ここでの「人間」とはどのような存在か。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ① 動物的本能を完全に制御できる能力を持つとともに、高度な文明を築き、発展させていける存在。
- ② 言語を理解し駆使する能力を持つとともに、社会性を身に付け、様々な精神活動を行うことができる存在。
- ③ 二足で直立歩行をし、道具を用いる能力を持つとともに、言語を操り知識を蓄えることができる存在。
- ④ 文化的な生活を営む能力を持つとともに、獣のような闘争心を活かし、他者と競合することができる存在。

問七 傍線部(三)「衣食足りては礼節を欠く」と言うしかない状況が生じたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ① 戦後の貧しい時代には、子どもたちが自ら社会的ルールを身に付けて就職していくという枠組が形成されていた。しかし、生活水準の向上した現代において、子どもたちは自分の生きる道を見出しにくくなり、就職や学業へのモチベーションを保てなくなってきた。
- ② 戦後の貧しい時代には家族や地域社会が強く結びつき、大人たちが一丸となって子どもにきめ細やかな教育を施してきた。ところが、物質的に恵まれ核家族化が進んだ現代にあつては、近隣との交流が希薄になり、親が帝王教育の必要性に気づかないケースが増えてきたから。
- ③ 戦後の貧しい時代、子どもたちは就職の必要に迫られて社会性を身に付けていかざるをえなかった。しかし、世の中が裕福になった段階でそのシステムは崩壊し、さらには、テレビなどが発する膨大な情報によって、親や学校の教育が十分に機能しなくなったから。
- ④ 戦後の貧しい時代と違って、経済的に豊かになった現代の親たちは子供を甘やかしがちであり、子どもが欲しがる商品であれこれ買ひ与えてしまう傾向がある。その結果、子どもたちが物に対するありがたみを感じられなくなってきたから。



問八 この文章の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

①反抗期は子どもが獣から人間へと近づいていく過渡的な段階のことを意味するが、核家族化が進んだ近年では反抗期を迎えることなく社会へと出ていくケースが増加してきている。

②「家庭↓学校↓社会」という段階を経た教育のプロセスは一九六〇年ごろから機能しなくなったが、その破綻はたんを補うものとしてテレビやインターネットなどの情報が家庭に入り込んでくることになった。

③高度成長以降子どもの数が減少したことに伴い、親は「教育熱心なタイプ」と「放任するタイプ」に二極化してきているが、現在必要とされているのは前者である。

④かつての学校は家庭と社会をつなぐ中間的生活空間としての機能を果たしていたが、近年学校教育の質は低下の一途をたどっており、その具体的な解決策も見つかっていない状況にある。

問九 この文章の主題として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

31

①現代商品の氾濫がもたらす教育的弊害

②子どもの潜在能力と帝王教育の重要性

③情報化社会の到来と学校教育の変容

④人間の成長過程における言語能力の役割

⑤日本の経済発展に伴う社会構造の変化